

〔研究論文〕

ピア・サポート(PS)プログラムを取り入れた第5学年学級集団づくりの研究

—PS グループスーパービジョンでの振り返りを活かした目標設定の展開を通して—

Implementing a Peer Support Program for Class Management in a 5th Grade
- Development of Goal Setting Through Peer Reflection in PS-Group Super Vision -

平 井 陽 伸

Akinobu HIRAI

西 山 久 子

Hisako NISHIYAMA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
筑後市立羽犬塚小学校

福岡教育大学教職実践ユニット

(2020年1月31日受理)

本研究は、児童相互のよりよい人間関係を築く学級集団をつくっていくことを目指し、ピア・サポート(PS)プログラムのサポート活動後に行う「振り返り活動」において、PS グループスーパービジョン(PS-GSV)を行い、それをもとに、より具体的に次のサポート計画を立てることで、児童の関わり合う力に与える影響を検討した。PS-GSVを行う学級と活動の振り返りのみを行う学級を分けたPSプログラムを第5学年の3学級に実施した。その結果、PS-GSVでの振り返りを活かしながら具体的な目標を設定した学級の方が、学校適応感尺度の「向社会的スキル」や「対人的適応」において有意な上昇が見られたり、集団効力感の「日常の学級活動における積極的取り組みに関わる学級集団効力感」において有意な上昇が見られたりした。このことから、振り返り活動において、PS-GSVを行い、次のサポート計画に活かしていくことは、児童の関わり合う力の向上に有効な手立てであることが示唆された。

キーワード：ピア・サポート(PS)プログラム, PS グループスーパービジョン(PS-GSV), 児童の関わり合う力

1 問題と目的

最近の子ども達の自尊感情の低さは多くの方面から指摘されてきているように(横山, 2010), 近年, 子どもたちの自尊感情の低さが問題となっている。自尊感情の低さは、いじめや不登校など不適応問題を引き起こしていると言われて(諸富, 1999)。また、わが国では、核家族化や少子化や情報化が進展しており、こうした社会環境の変化とともに、児童の人間関係に関する社会的能力は低下してきている(小泉, 2014)。よって、人間関係作りの未熟な子どもたちに、学校生活を通して、意図的に人とのかかわりを持たせ、自尊感情を向上させ、進んで人と関わり合うことができるようにすることが喫緊の課題である。

「ピア・サポート(以後、PSと表記)」とは、

傾聴・自己理解・他者理解・対立解消などを含む対人関係の向上に特化した包括的なトレーニングを行い、学んだスキル・態度を活かしてサポート活動を行うものである(滝, 2001; 中野・日野・森川, 2002)。「PSプログラム」とは、トレーニングと個人プランニング、サポート活動、振り返り活動を組み合わせた心理教育プログラムである(図1; 日本PS学会, 2018)。とりわけ、PSプログラムの中でも「個人プランニング」は、トレーニングで得た知識やスキルを活用し、自分で実践できる学級や仲間へのサポート活動を考え、計画することで、子ども達の主体性を高めることに効果があったことが実証されている(松永・西山, 2018)。しかし、個々の活動後の振り返りに焦点を当てた研究は見当たらない。

PSプログラムでは、トレーナーがサポーターに

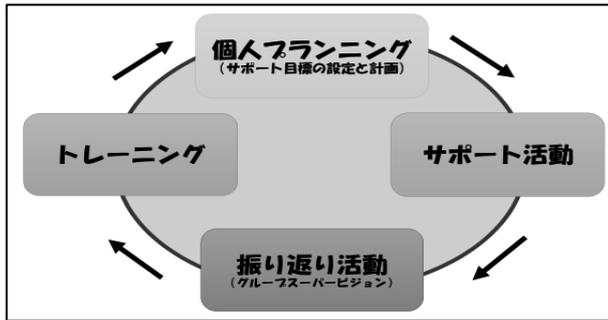


図1 ピア・サポートプログラムの構造
(日本ピア・サポート学会資料に加筆)

対して行う指導助言のことを「スーパービジョン」と言い、個人スーパービジョンとカンファレンスを含むグループスーパービジョンがある(菱田, 2008)。本実践では、PSにおけるグループでのスーパービジョンを「PS グループスーパービジョン(以後、PS-GSVと表記)」と位置づけ、先生が務めるトレーナーが、ピア・サポート内でのスーパーバイザー(PS スーパーバイザー)としてサポーター(児童)の精神的支援を提供したり、学習・スキル獲得・課題解決ができる機会を提供したりすることを目的としている。PS グループスーパービジョンの中で、うまくいったこと、問題点や困っていること、その解決策をグループで考え話し合う。そして、振り返ったことをもとに、個人のプランを見直し、新たな目標を設定していく。こうすることで、一人ひとりのサポート活動がより具体的・主体的になり、集団での実施により、共に成果を称え合い、よりよい人間関係を築くことにつながると思われる。

中野ら(2002)によると、日本の学校でPSプログラムが注目されているのは、基本的には、子ども達の行動や心の変化に対応して、何とか子ども達に欠けている人間関係育成能力を育てることを中心に、学校の活性化を図り、生き生きとした子ども達を育てたいという願いからきている、としている。また、SGE(構成的グループ・エンカウンター)やSST(ソーシャルスキルトレーニング)が注目され実践が進められているのも、人間関係育成能力が低いという子ども達の実態を克服する手だてとして効果的な方法であり、克服する内容が含まれているからである、としている。SGEやSSTとPSプログラムとの違いは、SGEは、主として学級の人間関係の育成を目標にした活動で、活動を通して自己理解・他者理解をすすめる、人間関係を結ぶスキルを学びながら、学級集団の人間関係をよりよいものにすることが目指されている。SSTは、生きていくために必要な様々な社会的スキルを身につけていくことが目標である。

これに対して、PSプログラムは、SGEやSSTで学んだスキルを基礎に、さらに他者を支援するための援助スキルを身につけ、学校生活の中で、様々な悩みを持つ子ども達に対して、支援の実践をすることを通して、サポーター自身の人間としての思いやりや支え合いの心を一層豊かにし、この活動を通して、他の子ども達にも影響を与えようとする活動である。SGEやSSTの応用ということにもなり、援助技法のなかには、SGEやSSTのエクササイズと共通するものがたくさん含まれている。PSプログラムは、援助トレーニングを受けた子ども達が、教師の指導・援助のもと、「日常的に」「継続的に」「学校生活の中で」自分にできる支援の実践活動を行い、孤立したり、悩んだりしている仲間を支援する活動を目指している。春日井(2009)も、人間関係を結ぶ力の弱さと自己肯定感の乏しさをあげ、お互いに成長し、つながりを回復していく取組として、予防開発的な生徒指導のたでの一つであるPSプログラムの有効性を述べている。これらのことから、自他を尊重し、進んで人と関わり、互いに高め合う人間関係を築く、よりよい学級集団を作っていく上で、PSプログラムを取り入れることは効果的であると言える。

本研究では第5学年を対象とした。松永・西山(2018)も第5学年での実践を報告している。榎本(2012)は、児童期後半の特徴として、自身の特徴を、身体的な特徴で表現する幼児期に比べ、対人関係に関わる特徴や能力で表現できるようになることを挙げている。そのため、協調性や対人感受性等、学校生活の中で友だちとの関わり方やスキルや態度をこの時期の子ども達に学ばせることが、その後の発達段階に重要な影響を与えると考える。

小学校での役割で見ても、第5学年は、所謂「高学年」となり、委員会活動等により、学校行事等をリードしていく立場となる。第4学年までと比べ、周りの友だちと協力して課題を解決していかなければならない場面が増えてくる。そこで、本研究でも第5学年を対象に、PSトレーニングでコミュニケーションスキルや共感スキル、サポートスキルに特に力を入れ、サポート活動で実践につなげ、児童のよりよい人間関係を築いていくことは意義があると考えられる。

以上のことより、本研究では、児童相互のよりよい人間関係を築く学級集団をつくるために、第5学年にPSプログラムを取り入れ、PSグループスーパービジョンでの振り返りを活かした目標設定による児童の関わり合う力の向上を検証することとした。

2 方法

研究期間

201X年9月～201X年12月

研究対象

福岡県内の公立A小学校に在籍する5年生（3学級）の児童と公立B小学校に在籍する5年生（3学級）の児童を対象とした。A小学校では、2種類の実践群としてPSプログラムを2回（①行事活用型・②日常型）実施し、質問紙による調査をプログラムの前後に計3回実施した。B小学校は、協力群として質問紙のみの協力とした（図2）。

評価

①「小学校における学級集団効力感の尺度」（淵上・今井・西山・鎌田，2006）

3因子（日常の学級活動における積極的取り組みに関する学級集団効力感，自主・自律性に関わる学級集団効力感，校外活動に関わる学級集団効力感）を測定する尺度について，5件法で尋ねた。また，検証のための分析については，HAD（清水，2016）を用いた。

②「学校環境適応感尺度（ASSESS）」（栗原・井上，2013）

6因子（生活満足感，学習の適応，教師サポート，友人サポート，向社会的スキル，非侵害的関係）を測定する尺度について，5件法で尋ねた。また，検証のための分析については，HAD（清水，2016）を用いた。

③学級担任への聞き取り調査

実践前後における学級全体や児童の言動の変容について，実践終了後に学級担任にインタビューを行った。

実施内容

(1) 1回目のPSプログラム（①行事活用型）

集団宿泊体験学習の2日間を含めた1週間をサポート活動期間とし，集団宿泊体験学習で，学級や仲間のために自分ができることを目標に設定する個人プランニングを行い，サポート活動を行わ



図2 研究デザイン

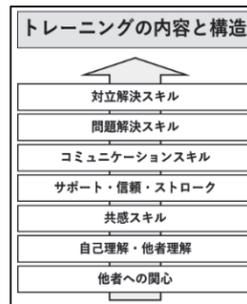


図3 トレーニングの内容と構造
（日本PS学会，2018）

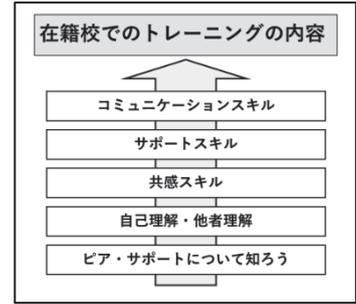


図4 在籍校でのトレーニングの内容

せた。また，振り返り活動では，報告者と学級担任がトレーナーの立場を務め，A小学校の中でも1学級（実践群①）で，PS-GSVを，残りの2学級（実践群②）では，活動のみの振り返りを行った。

①PS トレーニングの授業

(ア) 全体の構造

日本PS学会によると，PS トレーニングの内容と構造は，順序性が大事であるとされている（図3）。そこで本研究では，在籍校の課題に合わせてトレーニングを精選し，内容を構成した（図4）。

(イ) 1時間の構造

PS トレーニングの授業は，次の流れで行った。めあてに向けた雰囲気づくりの「アイスブレイク」，演習の時間を確保し，気付きを引き出す「主活動」，気付きを振り返ったり，友だちとシェアリングしたりして理解を深める「振り返り・シェアリング」，日常の活動につなぐ「日常生活への般化」の4段階である。

(ウ) 学びの個別化

PS トレーニングの学びを，児童それぞれの学びにするために，毎回学習ノートを配り，ファイルに綴じさせていった。授業で学んだ大事なポイントや，その時に考えたことや感じたこと等を書かせるようにした。ファイルは各自保管させ，いつでも振り返ることができるようにした。

また，毎時間の振り返りを書かせる際には，必ず，その時間で学んだスキルを集団宿泊体験学習や，日常の学校生活の中でどう生かしていくかを考えさせ，書かせるようにした。そうすることで，サポート活動への意識づけを行うようにした。

(エ) 学びの日常化

ノート以外にも，学んだことを常に意識できるように，また，他の学年の児童や教師にも授業の内容を知ってもらい，対象児童（5年生）に励ましや称賛の声かけを行ってもらうために，廊下の掲示板に1時間ごとに学習した内容をまとめて掲示していった。また，重要なポイントは各教室に

○ピアサポートとは…
 「ピア仲間(友達)」、「サポート=支援」の意味で、「ピアサポート=仲間(友達)が互いに支え合い、課題解決する活動」です。
 ピアサポートでは、以下のようなことを学んでいます。

- 自分や友達のことを理解すること
- 友達へ自分の考えや意見を上手に伝える伝達力
- 友達の意見や考えの上手な聴き方(傾聴力)
- みんなで協力するために必要なこと

このように、友達とたくさん関わりたいながら、人の機嫌を学んでいます。友達の気持ちや考えながらクラスや仲間のためにサポートをする中で、より、絆を深め、よりよい人間関係をつくり、思いやりのある学校風土をつくっていきたくと思っています。

○なぜ、ピアサポートの学習を行うのか…
 ピアサポートの学習を通して、他者とのよりよい関わり(人間関係力)を学びます。この力が得られることによって、自尊心が高まり、積極的行動、学習態度が身に付きます。それによって、基礎・基本の学習が成立し、さらに応用力を身に付け、学校生活をよりよく送っていくことができるようになります【図1】。つまり、学校生活を送るための基礎をしっかりと築いていくために、このピアサポートの学習を行うのです。

また、6年生は「高学年」として、下級生のお手本となり、学校全体を引っ張っていくリーダーとしての役割を担うこととなります。そのためには、まずは、身近にいる友達やクラスのために、自分にできることを考え、サポートしていくことを身に付ける必要があります。そのために、このピアサポートの学習はとて有効であると考えています。

○家庭でも思いつくようにお願いします！
 子ども達は、自分でどんなサポート活動を行うのか計画を立てて実施していきます。どんなサポート活動を行うのか、また、サポート活動をしてあげようと思ったか等、家庭でもお話をぜひしていただき、子ども達の成長を褒めてあげてください。よろしくお願ひいたします！

図5 ピア・サポート通信の一部

集団宿泊体験学習 Myピア・サポートプラン

活動	サポート内容	自己評価と感想
フィールドビンゴ		点/100点
キャンプファイヤー		点/100点
ビゼづくり		点/100点
その他・全体的に(自分の役割など)		点/100点

図6 プランニングシートの一部

○ 集団宿泊体験学習でのサポート活動でうまくいったこと

○ 集団宿泊体験学習でのサポート活動でうまくいかなかったこと

○ これからの学校生活にも関係する課題と解決策

【課題】

【解決策】

図7 PS-GSV ノートの一部

も掲示してもらい、日常化を図った。

さらに、保護者向けに「ピア・サポート通信」を毎回、授業後に発行し、保護者に対して、活動の内容の周知に努め、保護者からも励ましの声をかけてもらえるようにした(図5)。

②プランニング・サポート活動

集団宿泊体験学習の2日間を含めた1週間をサポート活動期間とし、集団宿泊体験学習で、学級や仲間のために自分ができることを目標とする個人プランニングを行い、サポート活動を行わせた。

個人プランニングの際、サポート活動を行う上で心配なことも含めて話し合わせた。そうすることで、サポーターの不安を取り除くようにした。

また、学級担任には、一人ひとりの個人プランニングを把握してもらい、帰りの会等で友だちに対するよい関わりに対して、褒める声掛けや価値づけを意識して行ってもらった。こうすることで、子ども達の意識化と意欲付けを行った。

この個人プランニングは、集団宿泊体験のしおりに糊付けして持っていき、常に自分で見て確かめることができるようにした(図6)。

③振り返り活動(PSグループスーパービジョン:PS-GSV)

集団宿泊体験学習に合わせたサポート活動を行い、その後、振り返りの時間を取り、実践群①においては、報告者と学級担任がトレーナーの立場をとり、サポート活動で、うまくいったこと、問題点や困ったこと、その解決策をグループで考え、話し合わせた。うまくいったことはもちろん、課題やその解決策も含めてシェアリングすることにより、今後のサポート活動の実践に向けた児童の取組を支援した(図7)。実践群②においては、活動の振り返りのみを行った。

1回目のPSプログラムの結果と考察

①小学校における学級集団効力感の尺度から

実践群3学級(103名)と、協力群3学級(85名)を分析対象とし、「日常の学級活動における積極的取り組みに関わる学級集団効力感」、「自主・自律性に関わる学級集団効力感」、「校外活動に関わる学級集団効力感」の3因子において、PSプログラム実践前後の群(実践群・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(図8)。その結果、校外学習に関わる学級集団効力感では、協力群は数値が若干下がったのに対して、実践群は上昇していたものの、3因子いずれにも有意な変化は見られなかった。学校行事に焦点化したサポート活動の、集団の高まりに対する効果を捉えることには、期間等の課題が残った。

②学校環境適応感尺度から

実践群3学級(103名)と協力群3学級(85名)を分析対象とし、PSプログラム実施前後の各因子の平均点を従属変数とした、群(実践群・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(表1)。

その結果、「向社会的スキル」において有意な上昇が見られた。また、有意な上昇は見られなかったものの、「友人サポート」や「学習の適応」、「対人的適応」の数値が上昇しており、PSプログラムが児童の学校適応感を高めるのに効果があったといえる。

③学級担任への聞き取り調査から

学級担任に、実践後に児童の行動の変容について聞き取り調査を行った。すると、「集団宿泊体験時に、『F. E. L. O. R!』と声をかけ合い、みんなで真剣に話を聞こうとしていた」や、「『シカのこま』を意識したのか、フィールドワーク中に友だちの顔色を見ながら、声をかけたり休憩をしたりしていた」という話を聞くことができた。また、普段の授業の際にも、教え合いが以前より活発になったという話もきくことができた。

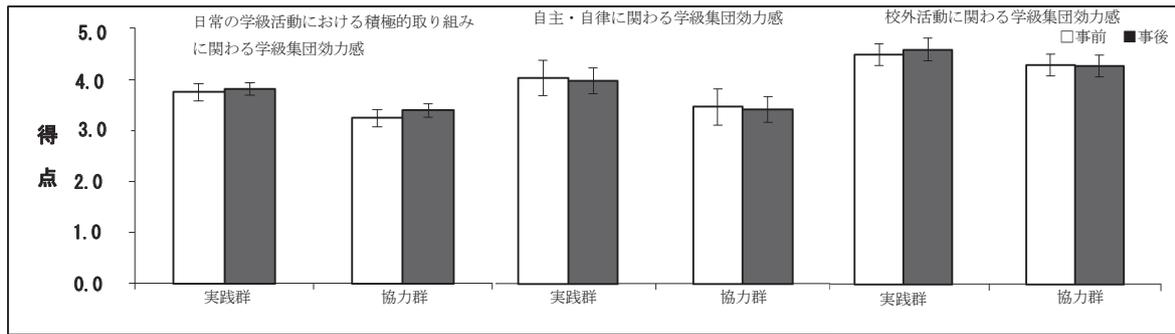


図8 集団宿泊訓練をターゲットとしたPS活動後の学級集団効力感の変容
表2 実践群と協力群のPSプログラムの事前・事後のASSESSの分散分析結果

	実践群(n=103)		協力群(n=85)		主効果 (群)	主効果 (時期)	交互作用 (1/186)
	事前	事後	事前	事後			
生活満足感	53.59(9.90)	53.12(11.23)	52.20(13.52)	50.49(12.97)	1.70(0.00)	1.82(0.01)	0.59(0.00)
教師サポート	54.27(9.72)	54.74(13.50)	53.08(10.35)	53.98(13.02)	0.41(0.00)	0.67(0.00)	0.06(0.00)
友人サポート	53.97(12.31)	56.30(15.82)	50.12(12.45)	49.83(14.37)	8.85(0.04)**	0.92(0.00)	1.53(0.00)
向社会的スキル	53.21(12.21)	56.83(13.41)	52.65(10.51)	52.64(11.02)	2.18(0.01)	6.61(0.03)*	6.70(0.03)*
非侵害的関係	62.59(15.29)	59.39(16.12)	50.84(13.07)	49.61(11.86)	33.61(0.15)**	3.38(0.01)+	0.46(0.00)
学習的適応	51.85(13.45)	54.00(14.88)	51.95(10.50)	52.56(12.34)	0.14(0.00)	4.02(0.02)*	1.24(0.00)
対人的適応	55.88(8.28)	56.82(10.73)	51.67(6.99)	51.52(7.49)	17.05(0.08)**	0.56(0.00)	1.11(0.00)

(*p<.05, **p<.01)

このことから、PSプログラムが児童により影響を与えたことが考えられる。また、集団宿泊体験学習という行事をサポート期間の一部としたことで、より児童の目的が明確になり、サポート活動が行いやすかったのではないかと推察する。

(2) 2回目のPSプログラム (②日常型)

学級や仲間のために自分ができることを目標とする個人プランニングを行い、サポート活動を行わせた。個人プランニングを行う際の目標設定では、実践群①では、振り返り後に、よかった点や問題点への解決策を参考に目標を設定させた。実践群②では、2学級では、通常のPSプログラムの振り返りの後、目標を設定させた。

①PSトレーニングの授業

1回目のサポート活動の振り返り活動により、明らかになった課題をもとに、仲間同士の問題(トラブル)を解決するスキルのトレーニングを行った。

②個人プランニング・サポート活動

2回目のサポート活動では、4週間をサポート活動期間とし、日常の学校生活の中で、学級や仲間のために自分ができることを目標とする個人プランニングを行い、サポート活動を行わせた。学級担任には、研究I同様、各個人プランニングの把握と、帰りの会等で友だちに対するよい関りに対して、褒める声掛けや価値づけを意識して行ってもらった。

③PS-GSVでの振り返りを活かした目標設定

2回目のサポート活動の目標設定は、実践群①では、PS-GSVで振り返った、よかった点や問題点を解決する解決策を参考にしながら目標を設定させた。目標設定の際は、報告者や担任であるトレーナーが指導助言を行うようにさせた。なお、実践群②では、振り返ったことは特に触れずに目標を立てさせた。

④プランニングシートの活用

プランニングしたことを意識化、毎日個人で自己評価させために、各個人の机の横にプランニングシートを掛けさせた。自己評価は、毎日100点満点とし、最初の2週間は帰りの会で時間を作り、評価をさせた。次の2週間は、特別な時間は設定せず、自分たちで声を掛け合わせ、自主的に振り返る時間をつくらせた。そうすることで、より、「自分たちのためのサポート活動」という意識をもたせた(図9)。



図9 プランニングシートの一部

2回目のPSプログラムの結果と考察

①小学校における学級集団効力感の尺度から

実践群①1学級(34名)と実践群②2学級(69名)、協力群3学級(85名)を分析対象とし、「日常の学級活動における積極的取り組みに関わる学級集団効力感」、「自主・自律性に関わる学級集団効力感」、「校外活動に関わる学級集団効力感」の3因子において、PSプログラム実践前後の群(実践群①・実践群②・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(図10)。その結果、実践群①において、「日常の学級活動における積極的取り組みに関わる学級集団効力感」が有意な上昇が見られた。また、その他の因子においても、有意な差は見られなかったが、数値は上昇している。振り返りを活かしたより具体的な目標設定をし、サポート活動を行ったことで、集団効力感が高まったと考えられる。

②学校環境適応感尺度から

実践群①1学級(34名)と、実践群②2学級(69名)、協力群3学級(85名)を分析対象とし、PSプログラム実施前後の各因子の平均点を従属変数とした、群(実践群①・実践群②・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(表2)。その結果、「向社会的スキル」「対人的適応」において有意な差が見られた。また、「友人サポート」「非侵害的関係」「学習的適応」においても有意な差が見られた。

このことから、PS-GSVで振り返ったことをもとに、より具体的な目標を設定する介入方法は、児童の学校適応感を高めるのに効果があるということがいえる。

③学級担任への聞き取り調査から

学級担任に、児童の行動の変容について、実践後に聞き取り調査を行った。すると、実践群①では、振り返りを活かして、目標をより具体化したことで、子ども達の意識化がさらに進み、自分たちで声を掛け合ってサポート活動を行ったり、振り返りを行ったりすることができていた、という話を聞くことができた。また、友だちのことをよく見るようになり、学級の雰囲気も、良くなってきた、という話も聞くことができた。さらに、友だちの考えをしっかりと聞き、うなずいたり、相槌を打ったりしながら、「ああ!」「同じ!」と友だちの意見や考えに対して、反応を返すような姿が授業中に見られるようになり、学習意欲の促進にもつながっているのではないかと、という話も聞くことができた。

これらのことから、PS-GSVでの活動の振り返りを活かした具体的な目標を設定し、日常のサポート活動を行わせることが、児童の人間関係に良い影響を与え、関わり合う力が向上し、より良い学級の雰囲気づくりに役立っている、ということが考えられる。

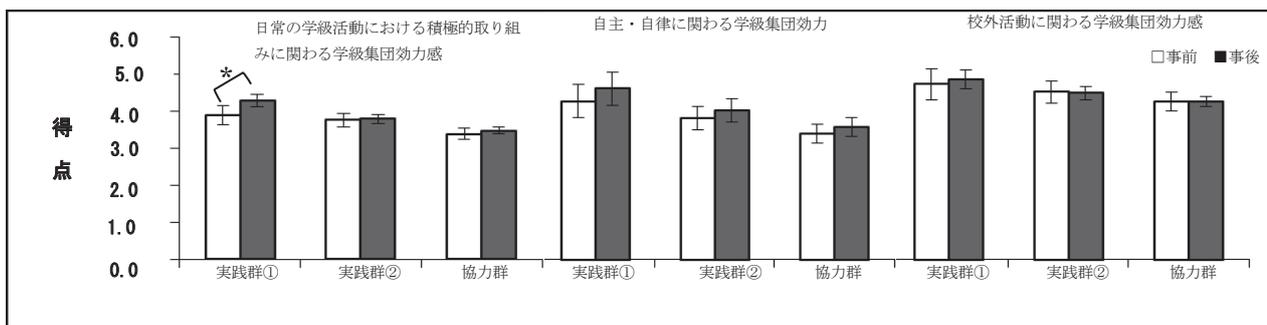


図10 学級集団効力感の変容 (*p<.05)

表2 実践群①と実践群②と協力群のPSプログラムの事前・事後のASSESSの分散分析結果

	実践群①(n=34)		実践群②(n=69)		協力群(n=85)		主効果 (群)	主効果 (時期)	交互作用 (1/186)
	事前	事後	事前	事後	事前	事後			
生活満足感	57.02(13.32)	60.23(13.26)	51.79(9.30)	51.85(12.11)	50.49(12.97)	51.38(13.31)	6.20**	2.50	0.91
教師サポート	59.52(13.65)	63.50(15.24)	52.76(12.59)	52.59(11.70)	53.98(13.02)	54.36(12.75)	6.76**	2.70	1.82
友人サポート	58.35(17.30)	65.85(16.59)	54.94(15.34)	56.34(16.43)	49.83(14.37)	51.69(15.57)	8.10**	11.26**	2.59*
向社会的スキル	56.61(11.93)	62.76(12.94)	57.50(13.68)	56.33(13.29)	52.64(11.02)	53.51(12.07)	4.49*	8.11**	8.11**
非侵害的関係	63.52(15.54)	69.70(14.89)	56.52(15.50)	57.17(16.27)	49.61(11.86)	50.70(13.91)	19.98**	6.84**	2.38*
学習的適応	52.50(14.45)	55.38(14.53)	55.18(14.51)	56.17(15.40)	52.56(12.34)	50.28(10.39)	2.21	0.53	4.69*
対人的適応	59.50(10.87)	65.45(10.20)	55.43(10.29)	55.61(10.85)	51.52(7.49)	52.57(9.46)	16.09**	20.07**	8.77**

(*p<.10, *p<.05, **p<.01)

引用・参考文献

3 総合考察

本研究は、第5学年において、よりよい人間関係を築く学級集団をつくるために、個人プランニングを含む PS プログラムを行い、効果を検討した。さらに PS グループスーパービジョンでの振り返りを活かした目標設定による児童の関わり合う力の向上を目指した。

実践後、対象の在籍校の3クラスの担任にアンケートを実施したところ、学級担任3名全てが、PS プログラムを取り入れたことで、校内研修や鍛ほめチャレンジ活動を下支えしたり、推進したりする基盤づくりに効果があった、と回答している。また、子ども達の変容として、「友だちとのかかわり方を考えて行動するようになった」「目標を持ち、目標に向かって行動するようになった」と回答している。合わせて、学級の雰囲気も良くなったという回答であった。さらに、3名とも PS プログラムが学習意欲の促進もつなげていると感じている。高須賀(2017)は、「児童の学級での居心地をよくすることは、学力を向上させる。」としていることから、学級の雰囲気の良さが子ども達の学力にも良い影響を与えたと考えられる。

子ども達の振り返りシートからは、以前よりも友だちと協力することができるようになったことや、友だちとの関わり方が分かって自信を持って接することができるようになった等の自信や、これからはサポート活動を続けていく、という意欲を感じる事ができた。

以上のことから、PS プログラムがよりよい人間関係を築く学級集団をつくっていく上で大変有効な手立てであることがいえる。

また、2回目の PS プログラムから、サポート活動を行う際には、PS-GSV での振り返りを活かしながら具体的な目標を設定することが、児童の学級集団効力感や学校適応感を高めていき、よりよい人間関係を築く学級集団をつくっていく上でより効果的であることがいえる。

しかし、今回、PS プログラムと PS-GSV を併用した実践群①が1学級のみであった。より正確な効果の検討には、対象学級を増やし、継続的な検証が必要である。さらに、実践が5年生の1学年だけであったので、今後は対象学年を広げ、他の学年でも有効かどうかを調査していく必要がある。学校全体で取り組んでいくことで、より学校の課題解決につながっていくと考える。

- 淵上克義 2005 学校組織の心理学 日本文化科学社
- 淵上克義・西山久子・今井奈緒・鎌田雅史 2006 集団効力感に関する理論的・実践的研究 岡山大学教育学部研究集録 131(1), 141-153
- 菱田準子 2002 すぐ始められるピア・サポート指導案&シート集 ほんの森出版
- 春日井敏之 2009 ピア・サポート 子どもとつくる活力ある学校 ぎょうせい
- 春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄 やってみよう!ピア・サポート 2011 ほんの森出版
- 小泉令三・山田洋平 2011 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S②-社会性と情動の学習 (SEL-8S)の進め方-小学校編 ミネルヴァ書房
- 国立教育政策研究所 2012 生徒指導リーフ「絆づくり」と「居場所づくり」Leaf.2
- 栗原慎二・井上弥 2016 アセスの使い方 ほんの森出版
- 松永千景 2018 小学校高学年での学校適応感を促進するピア・サポートプログラムの実践 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践講座最終報告書 97-104
- 中野武房・日野宜千・森川澄男 学校でのピア・サポートのすべて 2002 ほんの森出版
- 中野武房・森川澄男・高野利雄・栗原慎二・菱田準子・春日井敏之 ピア・サポート実践ガイドブック 2008 ほんの森出版
- 日本ピア・サポート学会 2018 トレーナー養成標準プログラムテキストブック Version3 (非公刊)
- 岡田倫代 2013 ピア・サポート力がつくコミュニケーションワークブック 学事出版
- 高須賀美雪 2017 学級での居心地のよさが学力に与える影響について-有効な指導の手立てと学校の取組のための一考察- 政策研究大学院大学
- 滝 充 2001 ピア・サポートではじめる学校づくり小学校編 金子書房
- トレバー・コール 2002 ピア・サポート実践マニュアル 川島書店
- 渡辺弥生・榎本淳子 2012 発達と臨床の心理学 ナカニシヤ出版
- 横山正幸 2010 子どもの自尊感情と体験の関係について 生活体験学習研究 10 53-62

